

エックハルトの隣人愛論

松田美佳

序

本稿では、エックハルト¹⁾の隣人愛論を、トマス『神学大全』²⁾の隣人愛論との比較を通じて明らかにすることを試みる。隣人愛についての言説は、エックハルトのラテン語・ドイツ語両著作に散見する³⁾が、本稿では、主にラテン語著作を対象とする。ラテン語著作には、トマスの隣人愛論の詳細に立ち入る議論が見られるからである。

以下においては、第1章で、自己愛と隣人愛との関係について、第2章では、神への愛と自己愛との関係について、第3章では、神への愛と隣人愛との関係について、トマスとエックハルトが述べるところを比較する。最後に、第4章では、両者の愛の概念を比較する。

第1章 自己愛と隣人愛

トマスが隣人愛に対する自己愛の優位を主張するのに対して、エックハルトは、自己愛と隣人愛の同等性を説いている。本章ではこの点について確認したい。

トマスが『神学大全』で隣人愛を論じるのは、愛徳 *caritas* 論（第2部の2第23-46問）の枠内である。愛徳の対象について論じられるのは第25問であるが、その第1項によると、愛徳の愛は神を対象とするだけでなく、隣人をも対象とする。なぜなら、愛徳によって人間は、神を根拠として隣人を愛し、神のために隣人を愛し、神の内にあるものとして隣人を愛するからである⁴⁾。さらに、同問第4項によると、人間は愛徳によって自分自身をも愛さなければならない。なぜなら、愛徳とは、

「人間が一義的には *principaliter* 神に対して、二義的には *ex consequenti* 神に

属するもの *ea quae sunt Dei* に対して抱く友情である。そのようなものには、愛徳を抱く人間自身も含まれる。したがって人間は、神に属するものとして *quasi ad Deum pertinentia* 愛徳から愛される他のものとともに、愛徳から自分自身をも愛するのである⁹⁾。

このように、トマスによると、隣人も自分自身も愛徳の愛の対象となる。そのように、そのどちらもが神に属するものとして神のために愛されるべきであると論じられる脈絡においては、隣人愛に対する自己愛の優位は主張されていない。この限りではエックハルトとの相違はないと言えよう。エックハルトも、自分自身をも隣人も神の内神のために愛すべきであると説くからである。「私が私自身を真に愛するのは神の内であるように、隣人を真に愛するのは神の内である⁹⁾。

しかしながら、トマスは、愛徳の「秩序 *ordo*」を論じる脈絡では、隣人愛に対する自己愛の優位を主張する。第 26 問第 4 項「人間は愛徳によって隣人以上に自分自身を愛すか」の *sed contra* でトマスは、マタ 22・39「あなたはあなたの隣人をあなた自身のように愛さなくてはならない *Diliges proximum tuum sicut teipsum*」についての一つの解釈を挙げている。それは、自己愛が隣人愛の「範型 *exemplar*」であることを示すものとして当該聖句を解釈する解釈である⁷⁾。この点ですでに、エックハルトとの違いが見られる。エックハルトは、自己愛が隣人愛の尺度 *mensura* ではないと述べているからである。「自己愛が隣人愛の尺度であるのではなく、『ここをあげての』神への愛が自己と隣人への愛の尺度、つまり根拠にして原因 *ratio et causa* である⁸⁾。

さて、トマスは、先に挙げた *sed contra* に則りつつ、続く主文で、隣人愛に対する自己愛の優位を主張する。それによると、愛徳によって神は至福の根源 *principium* として愛され、自分自身は至福の分有者 *particeps* として、隣人は至福の分有における交わり *societas* にある限りで愛されるが、至福の分有はその交わりに先行する。「したがって、人間は、神の次に自分を、誰か他の者よりも愛すべきである⁹⁾。このように、トマスは、隣人愛に対する自己愛の優位を主張する。

ちなみに、トマスは、他の箇所でも、マタ 22・39「あなたはあなたの隣人をあなた自身のように愛さなくてはならない」に対して、「人は隣人を自分と同等に *aequaliter* 愛すると理解すべきではない。むしろ自分と同様に *similiter* 愛すると理解

すべきである」との解釈を提示して¹⁰⁾、隣人愛と自己愛との同等性を否定している。

しかしながら、エックハルトは、マタ 22・39 の「あなた自身のように」に対して、トマスの解釈とは別の解釈を加えている。その際、エックハルトは、「……のように」を意味するラテン語の語として、マタイ伝やルカ伝の sic ではなく、マルコ伝の tamquam という表現に注目する。さらに、tamquam を「同じだけ多く tantum quantum」と解する。

「私たちはもはやただたんに、マタイとルカ [10・27] が言うように、私たち自身を愛するのと『同様に sicut』隣人を愛するのではなく、マルコ [12・31] が言うように、私たちが私たち自身を愛するのと『同等に tamquam』、隣人を愛するのである。……ところが、『同等に』とは、『同じだけ多く tantum quantum』という意味である」¹¹⁾。

聖句についてのこのような解釈に基づいて、エックハルトは、隣人愛と自己愛との同等性を主張する。「神を有し、神を愛する者は、隣人を自分自身と等しく pariter、また等しい仕方でも de pari 愛する」¹²⁾。このような同等性について彼は、「十全な同等性ないし等しさ、あるいはむしろ同一性 plena aequalitas sive parilitas aut potius identitas dilectionis sui et proximi」¹³⁾ という表現を用いて語っている。ここでエックハルトは、トマスが却下した aequaliter という副詞の名詞形を用いるとともに、plena という形容詞を用いて強調し、さらに、aequalitas を paritas と言い換え、最後に、identitas という、差異を排除する語を持ち出している。これによって、エックハルトが、トマスの見解から決別して、自己愛と隣人愛との同等性を説いていることが明らかである。

第2章 神への愛と自己愛

前章において確認したように、トマスが隣人愛に対する自己愛の優位を主張するのに対して、エックハルトは、自己愛と隣人愛との同等性を説く。ところが、隣人愛と自己愛をめぐる両者のこの相違は、神への愛と自己愛をめぐる両者の見解の相違とも連関している。つまり、隣人愛に対する自己愛の優位を主張するトマスが、神への愛の基礎に分有を想定し、分有を欲する自己愛を愛徳の愛に含めているのに対して、隣

人愛と自己愛の同等性を主張するエックハルトは、神を愛する際に、分有を欲する自己愛を否定すべきことを説いているのである。この点について本章では確認したい。

トマスによれば、人間は、愛徳の愛によってだけでなく、すでに自然本性的愛によっても自分以上に神を愛する¹⁴⁾。神への自然本性的愛については、『神学大全』第1部第60問第5項「天使は自然本性的愛によって神を自分自身以上に愛するか」で詳しく論じられている。同項本文では、「自分であるところのものが自然本性的に他者に内属しているようなものは、自分自身以上に根源的に、また自分自身以上に多く、自分が内属しているものへ傾けられている」¹⁵⁾と言われ、そのことが、手が身体のために、国民が国家のために犠牲になるという、部分と全体の関係によって説明されている。そして、部分が全体を自分以上に愛すること¹⁶⁾を大前提とし、すべての被造物が神に属することを小前提として、天使と人間が自然本性的に自分よりも神を愛することが帰結されている。また、同項第一異論解答では、何らかのものが、自分の「現実存在と善性の根拠 ratio existendi et bonitatis」を自分よりも愛することを大前提として、個々のものが神を自分以上に愛することが結論づけられている。さらに、同項第二異論解答では、「個々のものが神であるところの善に依存しているからというのでなければ、何らかのものの自然本性の内に、神を愛するということはないであろう」¹⁷⁾と述べられている。

このように、トマスでは、人間を含め被造物は、その存在と善が神に依存するがゆえに、神を自分以上に愛すると考えられているが、このような論証は、自然本性的愛についてだけでなく、愛徳の愛についても見られる。神を神のために愛する愛徳の愛も、神の至福への分有によって可能となることが明確に述べられているのが『神学大全』第2部の2第26問第13項第3異論解答である。

「神が各人にとって愛する根拠の全体であるのは、神が人間の善の全体であるということによってであろう。というのも、ありえないことではあるが、神が人間の善ではないと仮定するなら、人間にとって愛する理由はないであろうからである。したがって、愛の秩序についていうなら、人間は神の次にもっとも自分自身を愛するというのでなければならぬのである」¹⁸⁾。

この箇所によると、人間は神の至福を分有するからこそ、神を神のために愛するこ

とができるようになるのであり、だからこそ、人間は神の至福への分有を、隣人のためよりも自分のために欲すべきなのである。つまり、トマスでは、愛徳における神への愛も、分有を基礎として考えられており、そのために、その分有を欲する自己愛が隣人愛に先行すべきことが主張されているのである。

神への愛についてのトマスのこのような論法については、20世紀の論者によっても注目されている。有名なニーグレンの『アガペーとエロース』も、トマスが、ギリシア哲学的エロースとキリスト教的アガペーの矛盾を、アリストテレスのフィリアによって克服しようと試みたものの、その試みが不成功に終わっていると述べている¹⁹⁾。ニーグレンによると、トマスの教説は、自己愛を根底としているがゆえに、アガペーを容れるべき場所がないのである。そして、トマスの教説の根底に自己愛があることの証拠としてニーグレンが挙げるのが、上述の『神学大全』第2部の2第26問第13項第3異論解答なのである²⁰⁾。

このようなトマス批判に対してトマス擁護を試みた最近の研究の一例が、カール・ホルの解釈を批判するレオンハルトの研究²¹⁾である。ホルは、先の論法を、愛徳によってさえ人間が神を愛するのは最終的には人間が自分自身の至福に到達するためであると理解するが、これに対してレオンハルトは、「神の至福への分有は、愛徳の動機ではなく、愛徳を存在論的に可能にする根拠である」²²⁾との解釈を提示している。

トマスも愛徳における人間の神への愛を「神を神のために愛する愛」として考えているのは確かであり、その限りでレオンハルトの擁護も正当であると言えよう。しかし、トマスがそのような愛の出発点とするのは神の至福への分有であり、そのような分有を自分のために欲する自己愛が愛徳には含まれるとトマスは考える。そのことを示しているのが、『神学大全』第2部の2第26問第13項第3異論解答にほかならない。しかし、まさにトマスのこのような論法に対して、エックハルトは、神への愛が神の至福への分有によって可能になるなら、神を自分のために愛していることになると批判する。

「……人が自然本性的愛によって自分自身より神を愛することはないと、今日に至るまで多くの人々が主張しているところである。しかしながら、別の人々は、確かに結論として反対のことを主張しているが、しかし不適切な論証手段に拠っている。つまり、彼らは、被造物が自然本性的に自分自身よりも神を愛すること

を証明するが、被造物の存在が根源としての、かつ終極としての神に依存するから *quia suum esse dependet a deo ut a principio et ut a fine* と言うのである。しかしながら、このことをよく吟味するなら、このことは主張されていることと反対のことを証明しているのである。というのは、被造物が自分自身よりも神を愛するとしても、自分の存在がまさに神に依存しているからであるなら、神を自分自身のために *propter se ipsam* 愛するのであって、神を神のために *propter deum* 愛するのではないからである²³⁾。

ここで、自然本性的愛によって人間が自分自身より神を愛すると主張する「別の人々」の論証と考えられるのが、先に挙げた『神学大全』第1部第60問第5項である。このような論法をエックハルトが批判するのは、まさに彼が「神を神のために愛する愛」を、分有を求める自己愛を排して考えようとしたからではなかろうか。エックハルトは、神への愛において自分のものを求めることを徹底的に却下する。

「私たちは神だけを意図しなければならない。……私のもの、私の所有物を何も意図してはならない。……ちょうど、神もまた、彼のものを求めず、私たちの利益を意図するように²⁴⁾。

「感謝の活動において、人間は自分のもの、自身のものを何も求めず探さない。自分自身を否定し、自分を忘却し、『自分のものを求めない [1 コリ 13・5]』²⁵⁾。

「人間はすべての賜物にあたって、自分を自分の外に出して、自分のものを保持しないこと、何も求めないことを学ばなければならない。利益も快樂も内面性も甘美さも報酬も天国も自分の意志も求めないことを学ばなければならない²⁶⁾。

このような発言からすると、エックハルトでは、トマスが語るような、神の至福の分有を欲する自己愛が斥けられていると言えよう。エックハルトが至福の分有に基づかない神への愛を説いていることは、「分有 *participatio*」という用語を彼が可能な限り避けているというフィッシャーの指摘²⁷⁾とも一致している。

神の至福の分有を欲する自己愛の克服は、特にドイツ語著作で説かれるところであり、その表現は、ドイツ語説教12の「神の放下」²⁸⁾として頂点に至る。それによると、「ローマ人への手紙」第9章第3節のパウロの言葉「キリストから離れていることを私は意志する」の解釈として、「神を神のために放下すること」が最高究極の放下として挙げられている。「神を放下する」とはその際、人間が神から受け取ることができるものを放下することである。つまり、それは、トマスでは人間が欲すべきである、神の至福への分有を、欲さないことを意味しよう。

以上の考察からすると、神を神のために愛する愛について、トマスが神の至福への分有から出発して考えているのに対して、エックハルトは、神への愛において至福の分有を欲しない「神の放下」を説いたと言えよう。自己愛と隣人愛との関係をめぐる両者の相違には、このような神への愛についての見解の相違が背景にあると考えられる。

第3章 神への愛と隣人愛

以上において、まず、第1章では、トマスが隣人愛に対する自己愛の優位を主張するのに対して、エックハルトが隣人愛と自己愛の同等性を主張していることを確認した。さらに、第2章では、トマスが、隣人の至福よりも自分の至福を欲する自己愛を神への愛に必要なものと考えているのに対して、エックハルトがトマスのその論証を批判するとともに、神への愛において自分のものを求めないことを説いていることを確認した。続いて、この第3章で確認したいのは、神への愛と隣人愛との関係に関して両者が何を主張しているかである。

トマスにとっては、隣人愛に対する神への愛の優位は否定し得ない大原則である。神が「至福の原因 *beatitudinis causa*」として愛されるべきであるのに対して、隣人が「私たちと共に神から至福を分有する者 *beatitudinem simul nobiscum ab eo participans*」として愛されるべきであるがゆえに、人間は隣人より神を愛すべきなのである²⁹⁾。このような、隣人愛に対する神への愛の優位の主張と思われる発言は、エックハルトにも見られる。すでに引用した説教30の一文でも、「神への愛が自己と隣人への愛の尺度、つまり根拠にして原因である」³⁰⁾と言われていた。これによると、自己愛と隣人愛の同等性が主張されている点はトマスと違うにしても、神への愛が自己愛と隣人愛の「尺度」として考えられているわけであるから、神への愛の優位がトマ

スと同じように主張されているように思われる。さらにまた、エックハルトも、トマスが用いる部分と全体の比喩、具体的に言うと体の各部分と身体全体の比喩も用いている。もっとも彼は、トマスとは異なって各部分の同等性を主張しはするが、それでも部分を全体のために愛すべきことを説いている³¹⁾。以上の点からすると、トマスと同じくエックハルトでも、自己愛と隣人愛に対する神への愛の優位が考えられているように思われる。

しかしながら、エックハルト研究者ケルンは、「エックハルトにとっては、隣人愛と神への愛との間に競合関係 Konkurrenz はない」「神への愛と隣人愛との間に衝突 Hiatus はない」³²⁾と述べつつ、以下のようなエックハルトのテキストを挙げている。

「第一とか第二というものには、多い少ない plus et minus があり、段階 gradus があり、秩序 ordo がある。ところが、一 unum には、段階もなければ秩序もない。したがって、隣人より神を愛する者は、確かに善いが、まだ完全ではない。というのも、神を隣人の内で愛しているのでも、隣人を神の内で愛しているのでもないからである」³³⁾。

この箇所では、「一」の概念に基づいて、隣人愛に対する神への愛の優位という「秩序」が却下され、神への愛と隣人愛との相即性が示唆されている。次の箇所でも、他者への愛と神への愛との相即性について語られている。

「確かに、愛徳はすべての者たちを等しく、同等に愛する。というのは、一なる神は、一であり、すべての点で単純であるからである。その神を愛徳はすべての者のうちに愛するのであり、他のいかなる者をも神の外に愛することもなければ、神の外に愛することもない。したがって、愛徳は一を他のように、他者を自分自身のように、一を一切と同じだけ、誰かを神と同じだけ同等に愛するのである。というのは、誰かの内に、すべての者の内に神だけを愛するのであって、他の誰をも愛さないからである」³⁴⁾。

この箇所では、愛徳の愛の同等性、「一」性について語られ、他者愛と自己愛との同等性、他者愛と神への愛との同等性が説かれている。さらに、この箇所で説かれる、

愛徳の愛の同等性とは、トマスが論じるような³⁵⁾、さまざまな隣人に対する愛の間の優劣の否定も意味しよう。つまり、トマスが、愛の「秩序」を論じるのに対して、エックハルトはそのような秩序そのものをそもそも解消するような「一」なる愛について語っていると言えよう。

ちなみに、トマスは、隣人愛に対する神への愛の優位から、それ自体としての隣人愛の功德には神への愛の功德が優ることを導き出している³⁶⁾。そしてさらに、そのことから、隣人愛に関わる活動的生活の功德に対して神への愛に関わる観照的生の功德が「類的に *ex suo genere*」優ることを導き出している³⁷⁾。このことからすると、神への愛と隣人愛との相即性についてのエックハルトの見解は、キリストの話に耳を傾けるマリアではなく、立ち働くマルタを賞揚する彼の有名な「マリアとマルタ」の説教³⁸⁾へと展開していったと考えられる。

第4章 愛の概念

以上、第1章から第3章においては、隣人愛と自己愛と神への愛という三つの愛の相互関係に関して、エックハルトとトマスの議論の相違点を整理してきた。本章では、より一般的な観点から、以上のような相違点の基礎をなすと考えられる、トマスとエックハルトの愛の概念を比較したい。第一に、両者が考える、愛の対象を考察し、第二に、対象への愛の関係について考察する。

隣人愛をめぐるトマスの議論は、アリストテレスの定義による愛の構造「愛するとは、ある人に善を意志することである *amare est velle alicui bonum*」³⁹⁾を基礎としている。この定義についてトマスは、「愛の運動は二つのものに向かう *motus amoris in duo tendit*」と解説する。愛の二つの対象のうちの一つは、善が帰せられるべき基体 (*illud cui vult bonum*) であり、もう一つは基体へと帰せられるべき善 (*bonum quod quis vult alicui*) である。この二つのうち、愛の本来の対象とはあくまでも基体であって、基体へと帰せられるべき善は愛の本来の対象ではない。自己愛とトマスが呼ぶものも、そのような基体としての自己への愛なのである。このように、トマスは、愛の対象として、善とその基体との二つを考えつつも、愛の本来の対象としては基体を念頭に置いている。

これに対して、エックハルトは、トマスの考え方を前提しつつ、それを克服するような仕方であらうと論じていると考えられる。自分をも隣人をも神のために愛すべきであ

るとエックハルトが説くとき、自分や隣人は、神という基体へ帰せられるべき善として愛され、神は、善が帰せられるべき基体として愛されると思われる。そして、その限りで、トマスのいう、愛の二つの対象はどちらも保持されているように思われる。しかしながら、エックハルトでは、隣人愛に対する神への愛の優位さえもが否定されることからすると、神は善が帰せられるべき基体として愛されるとも言えない。むしろ、エックハルトでは、そもそも、本来的な愛は、善が帰せられるべき基体への愛としてではなく、基体に属さない善への愛⁴⁰⁾として考えられていると言えよう。そのような善については、例えば、「裸の端的な善、すべてのこれこれ、あれこれから切り離された善 *bonum nude et simpliciter, absolutum ab omni hoc et hoc, huius aut illius*」⁴¹⁾と言われる。このことからすると、エックハルトでは、真の愛とは、基体へ志向することなしに善を純粋に志向することとして考えられており、そのような愛の概念から自己や隣人や神への愛について考えられているのではないか。その際、神への愛の優位はただ、神が愛そのものであって⁴²⁾、愛の純粋性を体現する限りでのみなお保持されていると考えられる。

また、エックハルトの愛の概念について特に注目されるのは、自分と同じように愛すべき対象が、人間だけではなく、すべての被造物に拡張されているということである。「神を真に愛する者は、必然的に、隣人を自分自身のように、自分自身と同じだけ愛する。しかも、すべての近い人 *omnem proximum*、すなわち人間だけではなく、すべての近いもの *omne proximum*、すなわち神以外のすべてのもの *omne citra deum* を自分自身のように愛するのである」⁴³⁾。ここでは、人格的存在への善意 *benevolentia* を基礎とするアリストテレス的なフィリアの概念が乗り越えられている。アリストテレスによると、無生物への友情愛はありえないからである⁴⁴⁾。その限りで、カムプマンはそのエックハルト研究書で、エックハルトのこのような愛の概念から、「現代のエコロジーの問題意識や、人間が環境の中へ織り込まれていることについての知に対応するような創造倫理」⁴⁵⁾の可能性を示唆している。エックハルトの愛の概念がそのような射程をもっているのも、善への純粋な志向として愛について考えられているからであると考えられる。

第二に、対象への愛の関係について考えたい。トマスによると、愛は、「愛される目的を志向する運動の根源であるもの」⁴⁶⁾である。愛の対象は善であるが、善は現在していない場合にも愛の対象となりえて、主体は愛によって対象に向かう。しかし、

愛に関して、対象に向かう運動と、対象に至った静止とが区別される。現世での愛徳の愛は、あくまでも前者であって、後者ではない。愛徳の愛は、来世での神の享受 *fruitio* という究極目的に向かうものであり、このゆえに、愛徳の愛は、確かに、来世で神を享受するための「功德の根っこ *radix merendi*」⁴⁷⁾である。「神的善の享受に向かう人間精神の運動は、愛徳の固有の運動である。……したがって、永遠の生の功德 *meritum* は、一義的には愛徳に属する」⁴⁸⁾。しかしながら、愛徳の愛そのものはあくまでも神の完全な享受ではない。トマスでは、「志向において *in intentione*」目的を所有することと、「ものにおいて *in re*」目的を所有することが区別され、究極目的の完全な享受には、前者だけではなく後者も必要であるとされる⁴⁹⁾。

それに対して、エックハルトは、愛と善の関係についてトマスとは異なった見解を述べている。それは、善は愛されることによってのみ所有されるという関係である。

「可知的なものは可知的なものとしては、知ることによってのみ所有される。可視的なものは可視的なものとしては、見ることによってのみ所有される。したがって、善すなわち愛されうるものもまた、愛することによってのみ所有される」⁵⁰⁾。

愛と善とのこのような関係に基づいて、エックハルトは、たとえ他者に属するものであっても、それを自分が愛するなら、自分のものになることを説く。さらに、マタ 22・39の「あなた自身のように」に言及しつつ、隣人を自分と同じように愛するなら、隣人に属するすべての善が自分のものになることを説く。

「したがって、もし私が隣人を私と同じく強く等しく同等に愛するなら、まったくのところ、隣人のすべての名誉、栄光、功德、報いは[私のものと同じように]私のものであるであろう。隣人の内にあっても私の内にあるのと同じように感じられるであろう。すべての彼のものは、何らの違いもなく、私のものであるであろう」⁵¹⁾。

ここで表明されているのは、基体に結び付けることなしに善を純粹に志向することこそが、制約されない善の絶対的な現在を顕にするという考え方であると思われる⁵²⁾。

そして、隣人を自分と同じように愛するなら、隣人の至福が自分の至福と同じく喜ばしいものとなるというこのような考え方に基づいて、エックハルトは、隣人愛を説くマタ 22・39 等を「掟 *praeceptum*」ではなく、「約束 *promissio*」として規定する。

「『あなたの隣人を』云々。これは、ただたんに掟ではなく、約束ないし報いでもある。というのは、誰か隣人を私自身と同じように愛するなら、それがために、私は、彼の報い、功德、栄光について、私のものと同じだけ味わい楽しみ喜ぶからである」⁵³⁾。

さらにまた、当該聖句は、「功德 *meritum*」としてではなく、「報い *praemium*」として解釈される⁵⁴⁾。ということはつまり、エックハルトの隣人愛論では、愛徳の愛が功德としてではなく、報酬として考えられていると言えよう。トマスが至福への到達をあくまで来世に置き、愛徳の愛を来世での神の享受と区別して、来世の至福のための功德と考えるのに対して、エックハルトの隣人愛論はそのような来世主義との決別を意味する。そして、彼のそのような意味での現世主義を可能にしているのが、自分のものを求めない純粋な愛の概念であると言えよう。

結 び

以上において、トマスとの比較を通して、エックハルトの隣人愛論を解明することを試みた。

以上の考察によって明らかになったのは、エックハルトの隣人愛論が、トマスのそれと鮮やかな対照をなすということである。エックハルトは、トマスの主張する、隣人愛に対する自己愛の優位に対しては、両者の同等性を説く。神への愛のための自己愛の前提に対しては、自己愛の否定を説く。隣人愛に対する神への愛の優位に対しては、両者の相即性を説く。愛の「秩序」に対しては、「一」なる愛を説く。そして、基体への愛に対しては、基体に属さない善への愛を説き、功德としての愛に対しては、報酬としての愛を説くのである。

エックハルトは、自らの隣人愛論を展開する際に、トマスの名前を挙げているわけではない。しかし、彼がトマスの概念や例を用い、トマスの議論に言及していることは、本稿において引用してきたエックハルトのテキストからも確認できよう。彼は、

おそらく、一貫してトマスの隣人愛論を意識し、それと批判的に取り組んだものと思われる。さらに、エックハルトの隣人愛論は、それだけで完結しているのではなく、神の放下、「マリアとマルタ」の説教など他の教説とも連関しているが、そのいずれもがトマスの議論を意識し、トマスの議論との批判的対決のもとで展開されているのである。

「一」なる愛を説くエックハルトの隣人愛論に対しては、それが普遍的抽象的であるとの批判もなされうだろう。このような批判をめぐって、ピーシュは、友情について情感をもって語るエックハルトのいくつかの言葉を挙げながら、彼の隣人愛論が普遍的抽象的な愛についての思弁ではないことを主張している⁵⁵⁾が、エックハルトが説くような純粋な愛がどのようにして現実になるかに関しては、友情について、また人間への神の愛について語る彼の語りそのものに注目する必要があると私は考えている。このような方向の議論は、別の機会に期したい。本稿の論点は、あくまでも、エックハルトの隣人愛論そのものをトマスのそれとの比較によって明らかにすること存したのである。

注

1) 本稿でのエックハルトの引用はつぎのものによる。

Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff.

Die deutschen Werke, hrsg. von Josef Quint, (DW) Band I, II, III, N, V.

Die lateinischen Werke, hrsg. von Josef Koch u. a. (LW) Band I. 1, I. 2, II, III, IV, V.

エックハルトのラテン語著作の略号はつぎのとおりである。

「三部作への全般的序文」 Prologus generalis in opus tripartitum (Prol. gener.)

「命題論集への序文」 Prologus in opus propositionum (Prol. op. prop.)

「創世記註解」 Expositio libri Genesis (Gen. I)

「創世記比喩の書」 Liber parabolarum Genesis (Gen. II)

「出エジプト記註解」 Expositio libri Exodi (Exodum)

「集会の書についての説教と講解」 Sermones et Lectiones super Ecclesiastici (Eccli.)

「智恵の書註解」 Expositio Libri Sapientiae (Sap.)

「ヨハネ伝註解」 Expositio Sancti evangelii secundum Iohannem (Ioh.)

「説教集」 Sermones (Sermo)

本稿でラテン語著作のテキストを参照の際には、著作の略号と節番号、及び著作集の巻数と頁数を示す。

なお、以下の既訳を参照させていただいた。

『キリスト教神秘主義著作集 第七巻 エックハルト II』中山善樹訳、教文館、1993 年。

『エックハルト ラテン語説教集－研究と翻訳－』中山善樹訳註、創文社、1999 年。

『エックハルト ラテン語著作集 II』中山善樹訳、知泉書館、2004 年。

2) 『神学大全』は次のものを使用した。

S. Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Summa Theologiae, cura et studio Sac. Petri Caramell, cum Textu ex Recensione Leonina (1952)

3) 隣人愛について論じられているのは、主として以下の箇所である。ドイツ語著作では、説教 12, 25, 27, 28, 30, 74。ラテン語著作では、「出エジプト記註解」第 99 節、「智恵の書註解」第 99 節、第 109 節、「ヨハネ伝註解」第 290 節、第 385-391 節、第 541-544 節、第 626-633 節、第 724-737 節、「説教集」30, 40。「ヨハネ伝註解」で繰り返し隣人愛が論じられる中で、思想の深化・展開が見られることが注目される。

4) ST, II-II, q. 25, a. 1, c., “Ratio autem diligendi proximum Deus est: hoc enim debemus in proximo diligere, ut in Deo sit”.

5) ST, II-II, q. 25, a. 4, c.

6) Sermo XL, 2, n. 394, LW IV, p. 339.

7) ST, II-II, q. 26, a. 4, sed contra.

8) Sermo XXX, 1, n. 307, LW IV, p. 272.

9) ST, II-II, q. 26, a. 4, c.

10) ST, II-II, q. 44, a. 7, c.

11) Ioh. n. 627, LW III, p. 545-546. Cf. Ioh. n. 724, LW III, pp. 633-634, Sermo XXX, 1, n. 315, LW IV, pp. 276-277.

12) Sermo XXX, 1, n. 315, LW IV, p. 277.

13) Sermo XXX, 1, n. 307, LW IV, p. 272.

14) ST, II-II, q. 26, a. 3, c. もっとも、原罪によって自然本性が破壊されている限りではそうではない。

15) ST, I, q. 60, a. 5, c. “unumquodque..., quod secundum naturam hoc ipsum quod est, alterius est, principalius et magis inclinatur in id cuius est, quam in seipsum”.

16) Cf. ST, I, a. 60, q. 5, ad 1, “unaquaquae pars diligit naturaliter totum plus quam se”.

17) ST, I, a. 60, q. 5, ad 2, “non esset in natura alicuius quod amaret Deum, nisi ex eo quod unumquodque dependet a bono quod est Deus”.

18) ST, II-II, q. 26, a. 13, ad 3. “unicuique erit Deus tota ratio diligendi eo quod Deus

est totum hominis bonum: dato enim, per impossibile, quod Deus non esset hominis bonum, non esset ei ratio diligendi. Et ideo in ordine dilectionis oportet quod post Deum homo maxime diligat seipsum”.

- 19) ニーグレン『アガペーとエロース』第Ⅲ巻（新教出版社，1973年），220頁。
- 20) 同書，218頁。
- 21) Rochus Leonhardt, Glück als Vollendung des Menschseins. Die beatitudo-Lehre des Thomas von Aquin im Horizont des Eudämonismus, Berlin/New York 1998 (bes. 2. 4. 3. Amor und caritas in ihrer Bedeutung für die beatitudo-Lehre, S. 222-262).
- 22) Ibid, S. 248.
- 23) Ioh. n. 542, LW III, p. 473.
- 24) Sermo XXXI, n. 322, LW IV, p. 282. “Debemus enim solum deum intendere..., nihil mei sive meum..., sicut et deus nihil sui, sed nostram utilitatem intendit”.
- 25) Sermo XXXIX, n. 388, LW IV, p. 334, “in gratiarum actione homo non petit nec quaerit quidquam sui, nihil proprii, abnegat se ipsum, obliviscitur sui, ‘non quaerit quae sua sunt’”.
- 26) DW V, S. 281.
- 27) Heribert Fischer, Die theologische Arbeitsweise Meister Eckharts in den lateinischen Werken, in: *Miscellanea Mediaevalia* 7, 1970, S. 72, “Den Terminus der “participatio” vermeidet er soweit wie möglich”.
- 28) DW I, S. 195ff. 神の放下については、拙論「神への愛と神の放下—トマス・アクィナスの解釈との連関における、マイスター・エックハルトの「ローマ人への手紙」9章3節の解釈—」（『倫理学年報』第49集，2000年）で論じた。
- 29) ST, II-II, q. 26, a. 2, c.
- 30) Sermo XXX, 1, n. 307, LW IV, p. 272.
- 31) 「殴りかかられたとき身体全体を守るために手が出る」という例をトマスが挙げる（ST. I, q. 60, a. 5）のに対して、エックハルトは「目が見るということをするのは、足のためである以上に自分のためにはではない。足に仕えるのでもなく自分に仕えるのでもないからである。人間ないし動物という全体のためである」（Ioh, n. 385, LW III, p. 329）という例を挙げている。Cf. Ioh, n. 724, LW III, pp. 633-634, Sermo XXX, 1, n. 315, LW IV, p. 277.
- 32) Udo Kern, “Gottes Sein ist mein Leben”. Philosophische Brocken bei Meister Eckhart, Berlin/New York 2003, S. 116.
- 33) Ioh. n. 728, LW IV, p. 636, cf. Ioh. n. 290, LW III, p. 242.
- 34) Sap. n. 99, LW II, p. 434-435, cf. auch, Sap. n. 109, LW II, pp. 444-445.
- 35) ST, II-II, q. 26, a. 6-12.

- 36) ST, II-II, q. 27, a. 8, c.
- 37) ST, II-II, q. 182, a. 2, c.
- 38) Pr. 86 (DW III, S. 481-492). 「マリアとマルタ」の説教については、拙論「エックハルトの『マリアとマルタ』論—トマススの議論との関連で—」(『宗教哲学研究』第15号, 1998年)で論じた。
- 39) ST, I-II, q. 26, a. 4.
- 40) このような愛の概念は、存在や善性についてのエックハルト独特の概念とも関連していると考えられる。エックハルトは、基体に属さない善への愛を本来的な愛と考える一方で、存在や善性などの普遍的名辞が、基体に内属し依存する附帯性と異なることを主張している。Prol. gener. n. 8, LW I, p. 152 “de terminis generalibus, puta esse, unitate, veritate, sapientia, bonitate et similibus nequaquam est imaginendum vel iudicandum secundum modum et naturam accidentium, quae accipiunt esse in subiecto et per subiectum et per ipsius transmutationem et sunt posteriora ipso et inhaerendo esse accipiunt”。
- この点に関して更なる考察を進める必要があろう。
- 41) Ioh, n. 391, LW III, p. 334.
- 42) Ioh. n. 731, LW III, p. 638, Ioh. n. 734, LW III, p. 641.
- 43) Sermo XL, 1, n. 391, LW IV, p. 337.
- 44) Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, VIII 2, 1155 b 27-31.
- 45) Irmgard Kampmann, *Ihr sollt der Sohn selber sein! Eine fundamentaltheologische Studie zur Soteriologie Meister Eckharts*, Frankfurt am Main 1996, S. 105.
- 46) ST, I-II, q. 26, a. 1, c.
- 47) ST, II-II, a. 23, a. 2.
- 48) ST, I, q. 114, a. 4, c.
- 49) ST, I-II, q. 11, a. 4.
- 50) Ioh. n. 386, LW III, p. 329, cf, Ioh. n. 631, LW III, p. 548.
- 51) Ioh. n. 388, LW III, pp. 331-332.
- 52) Cf. Gen. I, n. 169, LW I, 1, p. 314, “Amor enim est boni habitus iam praesentis, in quo naturaliter quiescit”。
- 53) Sermo XXX, n. 312, LW IV, p. 314.
- 54) Sermo XL, 1, n. 390, LW IV, p. 333, cf. Sermo XL, 2, n. 395, LW IV, p. 335.
- 55) Herma Piesch, *Meister Eckharts Ethik*. Luzern 1935, S. 113f.